

拉致された少女に与えられた役目は、
魔術師たちの後継者を孕む事だった……

「ふうふう、
ラ○ネスちゃんのロマンコ！
最高じゃなあ♪」

「たすけ……て……
兄……うえ……」

淫紋を刻まれ、
射精されるほど快楽に染まってゆく♡

攫われたお嬢様

「皆様お待たせしました、
彼女がライネス・エルメロイ・アーチヅルテ嬢です」
「ほうこの少女が……」



ライネスを連れてきたのはバルザーンという魔術師だ

(奴は何だかんだでお人よしで面倒見がいいようだからな……
義妹が攫われたとあればさぞかし苦しんでくれるだろうよ)

彼はかつてロードエルメロイ二世を名乗る前のウェイバー・ペルベットによって
破滅させられ、それ以来ずっと復讐の機会をうかがっていたのだ



「さあ、ライネス譲そろそろ目を覚まして皆様に挨拶して下さい」
バルザーンがパチンツと指を鳴らすと徐々に瞳に光が戻っていく

「な、なんだ？こは？君たちは一体何者だ……!?」

「ふふ、ありていに言えば我々は二流三流の魔術師ですよ」

男の一人が口を開き、ライネスに語り聞かせる



「単刀直入に言いますがライネス嬢、
あなたには我々の跡継ぎを産んでもらいます」

「ふん、それで一つの胎盤をシェアするのかい？
やはり二流三流の君たちには品格と言うものが無いらしい……」

「そういうあなたも大したこと無いでしょう？
まあ腐ってもエルメロイ……その辺に転がっている者よりは幾分かマシでしょうがね(笑)」



「そうそう、抵抗しようとしても無駄ですよラインネス嬢」

!?

再びバルザーンが指を鳴らすと
ラインネスの体はその意思に反してスカートをたくし上げた

「っ!?!なっ!?!」

「貴女の体は既に我々の制御下です、
まあ意識は残してあげますよそちらの方が楽しめそうなのでねえ」



「さあ、そろそろ無駄話は終わりにしましょうか、手始めに私のチンポでもしゃぶって貰おうかな」

バルザーンはニヤニヤと薄笑いを浮かべながらライネスの肩に手を置いた……





「くっ……こんなバカな……」

「ふふ、睨みつけても無駄だぞ、さあ早くしゃぶれ！」

くっ
びゅ

びゅ

くっ

「んむう、ふーふー……」

ラインネスの体は指示された通りバルザインのペニスを口に含む

「いいぞ、そのまま舌で亀頭を刺激しろ、
笠の裏がわまで丹念に舐めるんだ」

「くっ、どうしてこんな事になったんだ!?!
なぜ私がこんな奴の……」



「ちゅる、じゅるる」
(だ、ダメだ頭がぼやけてきた……)

「ふっ！なかなかうまいじゃないか？
そうだ精液を吸い出すイメージでしゃぶれ！」

ライネスは巧みに舌を使いながら、
まるで母乳を吸う赤ん坊のようにペニスにすいついた

ちゅぽちゅぽ、と言う音が次第に大きくなり部屋に響く



「んちゅ♡ちゅーちゅー♡♡」
くま、マズいこのまま流されてしまいそうだ……

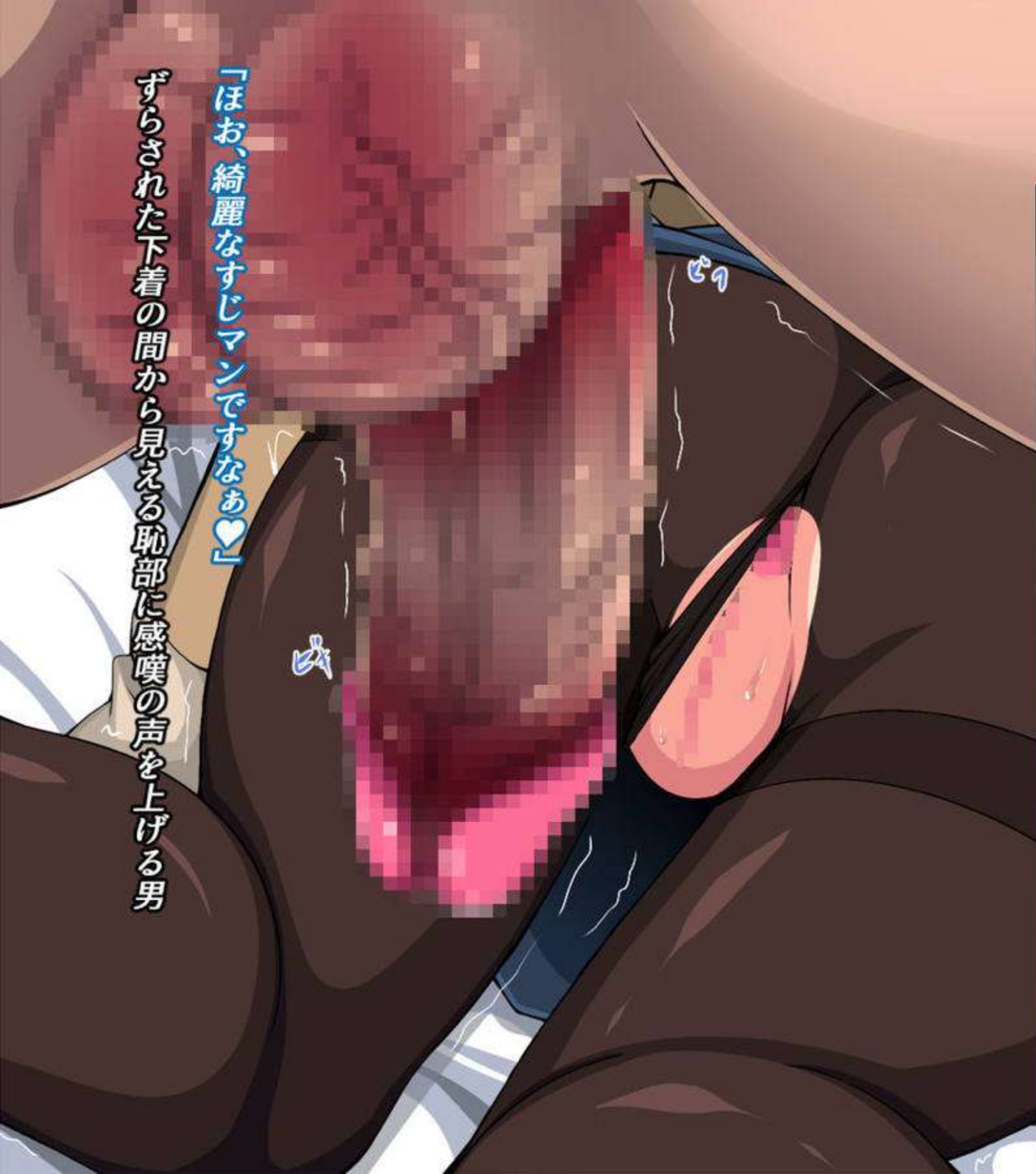
抵抗しても無駄という事実が徐々にライネスの思考を狂わせて行く

「ふーふー、そろそろ私も限界ですねえ、
こちらの穴……先に使わせてもらいますよ」

「ふふ、どうぞどうぞ、遠慮なくぶち抜いてやってください」



「ほお、綺麗なすじマンですなあ♡」
ずらされた下着の間から見える恥部に感嘆の声を上げる男





「さあライネス譲いけますぞー！」

男は野太いペニスをライネスの割れ目に押し当て力を込める



「うぎっ！？ま、待て！待ってくれー！」

ライネスは処女膜が破れる痛みでバルザーンのペニスを放し行為を止めるよう懇願する

勿論願いは聞き入れられることは無い、むしろ男の嗜虐心を掻き立て喜ばせるだけであった

次の瞬間……男はまるで斧でも振り下ろすかの如く
力いっぱい肉棒を突き入れた

「うぎいいい……！」

悲鳴が部屋中に響く……

根本まで啜え込まされたラインスの膣はたった一突きで破壊された

ズ
グ
グ
グ



一番奥まで蹂躪した男は満足そうにペニスを引き抜き
次の突入に備える



「うぐっ、かは、はーはー……」
強烈な不快感をもたらすものを取り除かれ、
ラインスは荒い呼吸を行った

結合部からポタポタと血がしたたり落ち、
シートを汚していく

再び男が肉棒を打ち付けた、
今度は連続で何度も何度も出し入れを行い始める

「ぐうっ、あぐっ、うぎっー」
（どうしてだっ、どうしてこんな事になったんだ……）

突かれるたびにライネスの口から短い悲鳴が漏れるが
その声はただただ男を興奮させるだけであった



「おらー！こっちも出すぞー！ちゃんと口で受け止めろ！
しっかり飲み下すんだぞー！」

「良い光景ですなあ、見てみるとペニスが元気に……
なんだかもう一発出せそうですよ！」

男は笑いながら再び膣にその怒張を差し入れ、
子宮口に自らの亀頭をめり込ませた

ドグ
ジッ
ッ

ズッ

ビビ 21616v

ブホ

あゝ♡

あゝ♡

「おおおお…また…ださりえ…♡」

ビビ

男が発射したものが、子宮の内壁を刺激する
疼くような快感が下腹部を満たしてゆく

一方的な凌辱であるにもかかわらず、
ライネスの体は快楽に染まってゆくのだった…

「翌日」

「さあ、今日から本格的に調教開始だな」

「より素質のある子供を産むためには準備が必要ですからなあ」

「くっ……」

（このままだと昨日みたいに犯される）

「ふふ、睨んでも何ともなりませんよ？
まあそんな顔が出来るのも今のうちですが」



「……? あつう!?!」

下腹部に熱を感じたライネスが目をやると、
肌に奇妙な文様が浮かんでいた

「ライネス嬢、これが何かわかりますか? 淫紋というやつです」

「これは男の精液に反応するものでね、
刻まれた女は射精されるたびに強烈な快楽を感じようになります」

「そしてこの淫紋には魔力をため込み必要な時に違う対象に移す事が可能です」

「我々が貴女に精液を注ぎ続ければ、

子供が生まれる時にその膨大な魔力を引き継がせることが可能になるのですよ」



「さて先ずはアナルに行きますか」

男はふざけた口調で話しながらイキり勃ったペニスを肛門に突き立てた

「ひぎっ!?!ま、まてえ!?!そ、そこはちが…!?!」

「何を言っているのですか?」
優秀な胎盤は膣や子宮だけではなく全身で精を受け止めるものですよ?」

男は容赦なくライネスのアナルを突き上げた



勿論これで終わりではない、
アナルがある程度広がったのを見て別の男が次なる行動に移る

「では前の方も行きましようか、二本差しですよ」

「ひぎっ!?!」

あっ

かっ

ズ
ッ
ユ
ッ

グ
ッ

あ
っ

び
ん

巨大な肉棒が交互に出入りを繰り返して、
ライネスの内側を思う存分かき回してゆく
結合部からはグチュグチュ♡という音が絶え間なく漏れ続ける

「うぐっ、あがつ、かはっ♡♡」

「苦しそうだねえライネスちゃん、しかしワシももう限界のようだ」

奥にいた男が肉棒を痙攣させながら近づく

「呼吸が荒くなっているところ悪いが、口の方を使わせてもらおうよ！」



「ぐぼー!? んごお!」
(な、なんだこれは... 喉使われて!?)

「ふうふう、ライネスちゃんのロマンコさいこうじゃなあ♪」

んごお!

挿入された肉棒はゆっくりとしかし確実に喉を蹂躪してゆく

んごお!

んごお!

んごお!

「ぐえ、ごぶっ、おごお！」
(い、息ができな……い)

ペニスを根本までねじ込まれ呼吸困難から痙攣を始めるライネス

が

が

ズ
ズ
ズ
ズ

「ふおお！たまるん！」

「頭固定して窒息死寸前になるまで喉奥犯すの気持ちいいわい！」

「おっと！イカンイカン、つい気持ちよすぎてやり過ぎてしまう♪」

「そう言うとなんはゆっくりと肉棒を引き抜きはじめた」

うん

「死んでしまっただけじゃ意味ないからもう、今呼吸させてあげよう！」

あ

あ

あ

「げほげほ、ゴホゴホ！」

気道が確保され呼吸が可能となったライネスは、
肩で大きく息をしながら必死に酸素を取り入れた

「フヒヒ、そうそう、ちゃんと呼吸するのだよ？終わったら再開するからのう！」

ずる〜

ラインネスが十分に呼吸を行ったのを見計らい、男は再び口内を犯し始める

「うむっ！ー！うぐっ！ー！ふぐう」

うぐっ
うぐっ
うぐっ

おっ
おっ
おっ

「おおっ！最初よりも具合がいいなあ、
ワシの我慢汁とラインネスちゃんのエダレが混ざって気持ちいいぞお！」

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

「ふひ♡気持ち悪いかい？ライネスちゃん！だが絶対に嘔吐してはダメだぞ？
ワシがちんぽで栓をしてやるからのお♪」

「うぎい、んお、おえっ！！」

指示を受けたライネスの体は胃からこみ上がって来たものを必死に飲み下す

おげっ

「おほっ！飲み込むたびにちんぽギュウギュウ締め付けてきて最高じゃあ……」

グッ

がっ

「うっ、でるぞ！ライネスちゃん！！
この日のために貯めに貯めたワシの子種、飲み干せ！！」

男のペニスがビクビクと脈動する、そのたびに半分固形とも思えるような精液が
大量に発射され、胃の中に流しこまれてゆく

が
い
い
い
い
い

ん
ん
ん
ん
ん

ふ
ふ
ふ
ふ
ふ

ぐ
ぐ
ぐ
ぐ
ぐ

「んごおおお、おごおおお……！！」
（じ、死ぬう……）

ギ
ギ
ギ
ギ
ギ

び
び
び
び
び



「ふひゅーふひゅー、絶対に吐き出すんじゃないぞ、ライネスちゃん！」

そう言うと男は半分萎えかけたペニスを引き抜いた

「んぐうっーいぼいぼっ」

くっくっくっ

びびっ

びびっ

ブルブル

ガッ

男の言いつけを守るべく口を堅く閉じるライネスの体ではあったが
大量の子種はあつという間に食道を駆け上り口内にたまってゆく

「うーむ、どうやら無理らしいのお、折角たっぷり注いでやったのにお」



「んげええっ！おぼおおお！！」

男は残念そうに、容器を取り出す
次の瞬間ライネスは限界を迎え、大量の精液を吐き出した

おげっ

おげっ

おげっ

「うーん、初イラマだと吐いちやうか〜(笑)」

「まあ、それは追々訓練しようねえ、
しかし下のお口は随分具合が良くなってきてるよ」

「ひうっ!?!」

「うんうんお尻の方もギュウギュウちんぽ搾ってきてお、
一刻も早く出して欲しいって言ってるね(笑)」

「ふふ、じゃあ射精するよー!ちゃんと受け止めてねえ!」

ドキッ

グ

グ

グ

グ

「や、やめっ！おおおおほおおお！？？？♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

静止する言葉を言うより前に、男たちが白濁液を吐き出した
射精された子種に淫紋が反応し、絶頂の快感を増幅してゆく

「んひいいい！？♡♡♡イグううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡
(だ、だめだ、これは気持ちよすぎて頭がおかしくなるううう♡♡♡)



「ふひひ、いいいきっぷりでしたよ〜ライネス嬢(笑)」

「いやぁ素晴らしい穴ですねえ、これならば何度でも射精できそうです！」

あ〜〜

は〜

男たちが楽しそうに談笑する中、ライネスの口からかすかに声が漏れる

「……あ、義兄……う……え、たすけて……くれ……」

びゅん

グハッ

グハッ

グハッ



〜一週間後〜

「んぐ♡おい♡おっ♡♡♡」

「ふーふー、ライネスちゃんの喉マンコをさっくら♡」

一週間、
休むことなく犯され続けたライネスの精神は既に崩壊している

特にここ数日は口内と喉の開発に費やされ、
大量の精液を飲まされ続けていた



「くううう、でるぞ！特濃ザーメン！！」
男は頭をがっしりと掴み、
溜まりにたまった欲望を吐き出す

「んぐう♡んか♡んか♡んか♡」

ライネスは喉を鳴らしながら白濁液をの飲み込み、
嬉しそうに肉棒にしゃぶりつく

今の彼女にとって男たちの精液は何ものにも代えがたいご馳走になっていた

「ぶはっ♡はーはー♡♡♡♡♡けぶ♡♡」

「フヒヒ、吐かずに全部飲めるようになったねえ、いい子だよ」

いっっ

いっっ

「頑張って良い穴になったライネスちゃんには♡褒美を上げよう！」

そう言う一人の男がライネスの肛門を塞いでいた栓を抜き始めた

「さあ、途中まで出してあげたから、
ここからは自分で排泄してみようねえ」

んん

はっ

かっ

いっ

んん

んん

「んふー♡フリー♡んおほおほ♡♡♡」

ライネスが腹部に力を入れると腸内を塞いでいた異物が排出される

「おおっ！これは産卵でもしているかのようですなあ(笑)」

「頑張れ！ライネスちゃん(笑)」

ライネスは男たちに促されるまま、一つまた一つと玉を排泄していった



ぶぼっ♡という音と共に尻の穴を塞いでいた最後の異物が飛び出す
その瞬間ライネスは尻をガクガクと震わせながら絶頂を迎えた

「んひい♡いぐうぐう♡♡♡♡♡」

まるで洞窟のようにぽっかりと開いたアナルから
下品な音が発せられる

「フヒヒ、おめでとうライネスちゃん！全部吐き出せたねえ」

「これはご褒美だよー！」

ライネスを上にしたせていた男がイキりたつたペニスを膣に押し込んだ

次の瞬間、男は激しく腰を打ち上げる

「んぎい♥♥ちんぽおおお♥♥イクイクイクううう!?!♥♥♥♥♥」
「ふふ、数日ぶりのチンポはきくだろう?」

「ちんぽお♥しゅきい♥♥♥♥♥」

ずちゅ

ベギ

くちゅ

ズ



「おっほ♡膣内にゆるにゆる絡みつきながら締め付けてくる！
完全にイきながらよがっつてるねえー！」

「おひいいい♡んおおお♡♡♡でりゅうう♡♡♡」

突如ライネスの尻穴から大量の白濁液が噴き出した
ぶりゅぶりゅ♡と下品な音を立てながら排泄される
それは数日間飲まされ続けた精液だった

「ふひひ、いいぞいいぞ！
もっと突いてやるから全部出してしまえー！」

男は更に腰を打ち付ける速度を速め、
乱暴に子宮を突き上げ続けた……



∩
数時間後
∩

「ふん！ふん！ふん！ふん！」

あれから数時間、
男たちは代わるがわるラインネスに精を吐き出し続けていた

「くううー出るぞー！ー！」

最早何発目かも分からない射精が子宮に注がれる

「んひい♡きたあ♡♡♡」

「ん♡お♡の♡ふ♡ー♡ふ♡ー♡♡」

じゅん

ん♡

お♡

ん♡

ん♡

ん♡

男が肉棒を引き抜くと入りきらない子種が
ドロドロと流れ落ち地面を濡らしてゆく

既に何度となく繰り返された光景だ

零れ落ちた液体は他の男たちが同じように出したものに合流し、
より大きな水たまりを作る



「そろそろ私の出番だな」

顔をマクラにうずめ
息も絶え絶えに痙攣するライネスを見下るしながら
大男はつぶやいた

その男のペニスは明らかにライネスの腕より太く
常軌を逸した大きさだった

「これは邪魔だなあ(笑)」

そう言うと、
男はライネスのアナルから勢いよく尻尾を引き抜く



「んおお♡おほっ♡おっ♡♡♡♡♡」

詰まっていた物を引きずり出され、
だらしなく開いた穴がヒクヒクと蠢く

「ふふ、良くほぐされた穴だな、
だが魔術で強化したチンポを咥え込むのは大変だぞ！」

そう言うと男はライネスの汚穴に巨大な肉棒を突き立てた

「んいお♡あぎっ♡♡おおおおお♡♡♡」

ライネスは獣の雄たけびのような声を上げながら
ペニスを包み込んだ

男は上に覆いかぶさり
全身を激しくふりながら、快楽を堪能する

「ふん！ふん！ふんっ！ー！くうう、
ギチギチに締め上げてきてチンポもぎ取られる！
肉棒が出入りするたびに
ライネスの腹部がポコポコと波を打った

「ぐうおおおおおー！出すぞおー！」

「おーおお♡んげえええ♡♡♡♡」

大男は込み上がってきた子種を排泄した

解き放たれた精液の量は尋常ではなく、まるで蛇口を全開にしたかのような勢いでライネスの腸内に流れ込む

一瞬にして体内は男の精液で満たされ、入りきらなかったものが口から逆流し枕を濡らしていった

びゅん

ゴ

オホ



男は満足そうに笑うと無遠慮に肉棒を引き抜いた
その勢いで直腸が外部に引きずり出され、真っ赤な薔薇を咲かせる

「ぶっぶっ、気持ちよかったぞっ」

んっ

んっ

びっ

びっ

おっ

ほっ

壊されたアナルからドロドロとした白濁液が大量に流れ落ちてゆく
ライネスの意識は既に無く、
死にかけの魚のようにビクビクと痙攣を繰り返すのみだった



尻穴を破壊され、意識を失った後も男たちの凌辱は続く

「それにしても、あの人はどれだけ出したんだらうなあ」

力なく横たわるライネスのアナルからは
未だに大男が出した子種が流れ出ていた

「まあ我々は我々で頑張って魔力を注ぎますか」

そう言うとも男たちは自らのペニスをいきり立たせる



「くううう!」
意識飛んでるくせに肉穴がチンポに絡みついてくる!

グチャグチャ♥という水音を周囲に響かせながら
男はライネスの穴を堪能した

「むう!?!これは子宮が亀頭を飲み込んで!?!」



「あ♡ひ♡り♡き♡り♡」

「ふーふー……くうう、な、なんてエロ穴だ！
子宮全体がチンポに吸い付いてくる！」

「ふひひ、どうやらケツ穴ぶっ壊された時に
前の方も仕上がったようですねえ(笑)」



男はあまりの快感に一度肉棒を引き抜き態勢を立て直そうとする

しかし……

「いぢいぢいぢいぢい♡♡♡♡」

子袋はペニスに絡みつuki一緒に引きずり出されてしまう

「クク……そうか、そんなに欲しいか、
龟头ちゅーちゅー吸いやがって!」



「あひ♥んおお♥でてりゅうう♥」

ラインエスの瞳が朱く染まり、淫紋が輝いた

「おおっ！これは、受精したか！」

男たちが歓声を上げる

「どうやら排卵日だったようですねえ(笑)」

「おめでとうラインエスちゃん！
今日から君はママになったぞ！」



「うっ！出るっ！ー！ふふ、これはお祝いのしるしですよw」

んが、男たちは祝砲を上げるかのようにライネスに向かって射精した

ドロ♡

がが

ゆるる

おるる

どろ

びん

「びぎっ♡♡♡んふう♡♡せ、せいししゆきら♡♡♡」

「ふふ、いい子だ、これからも毎日犯してやるからな！
優秀な子を産むんだぞ！」

んが

〜10か月後〜

「あひ♥んひゅう♥イクイクううう♥♥♥」

「ふふ、随分と立派な苗床になったもんだ!」

バルザーンは乱暴に腰を振りながら、ラインネスを犯していた

ズグッ

トキッ

ズグッ

「ぐう!出るぞ!〜妊娠マンコでしっかり受け止める!」

「んひゅ♡きもちいい♡♡」

「クク、快楽で頭おかしくなっって完全にキャラ崩壊してるなあ(笑)」

「そろそろ出産予定日だろ?どれ手伝ってやるう」

バルザーンが指を鳴らすと淫紋が光を放つ



「んぎ!?!ひぎいいいっ♡♡♡♡」

先ほどまで肉棒に貫かれていた穴が広がる

「あぎい♡あ、あかちゃんできてくりゅううう♡♡♡♡」

ラインスの腹をパンパンに膨れ上がらせていた赤ん坊が
遂に誕生する時が来たのだ



「んぐうっ♡うううっ♡んぐううっ♡♡♡」

下半身に力がこめられるたびにめっくりと赤ん坊が排出されてゆく

「ふふ、いいぞいいぞ、その調子だ頑張って産み落とせ！」

「ひいひい♡んおおお♡♡おまんこ♡われりゅううう♡♡♡」

男たちがはやし立てる中、ライネスは出産を続けた



ライネスは再びイキみ始めた
再度大きく広がった穴からブリュブリュ
と音を立て赤子が吐き出される

出産は先ほどよりもスムーズに行われ、一気に上半身まで排泄された
「いいぞいいぞ、あと少しだ！全部出しちまえ！」



「あがぁ♡んぎいひひひひ♡かはっ…はーっはーっ♡♡」

バルザーンの指示に応じるようにライネスは下半身に力を込め赤ん坊をひり出した

ビュッ〜

「ふひひ、よく頑張ったね！立派に胎盤としての役割を果たしたぞ！」

「さあ、褒美をあげよう！うっ！出る…！」

男たちは自分達の後継者の誕生を祝いライネスに新しい子種を振りかけていった

びゅる

あーっ

ドポ



REC

「さて、出産でお疲れの所悪いんだがな」
バルザーンはビデオカメラを構えながらライネスに語り掛ける

「君の義兄君が我々の事を嗅ぎまわっていてねえ、
いい加減鬱陶しくなってきたな」

「諦めさせるためにライネス嬢から縁を切ってほしいんだよなあ……
映像を取ってあげるから兄君にお別れをしてくれるかな？」



捕まった日から毎日犯され続け、快楽漬けにされたラインスにとって
思考して言葉を発するのは10カ月ぶりであった

「あ……う……あ、あに……うえ？……
と、とつじえんいなくなつて、しゅ、しゅまだやい♡♡
「だ……が心配しないでくりえ♡
今、わたしは……ん♡……しあわしえら♡♡」

「えるめりよい家は、あにうえ……にあげりゆかりや♡♡
わたしのことはわじゆれてくりえ♡♡♡」



REC

数日後、ロードエルメロイⅡ世の下に
一本のビデオテープが届けられた…

END













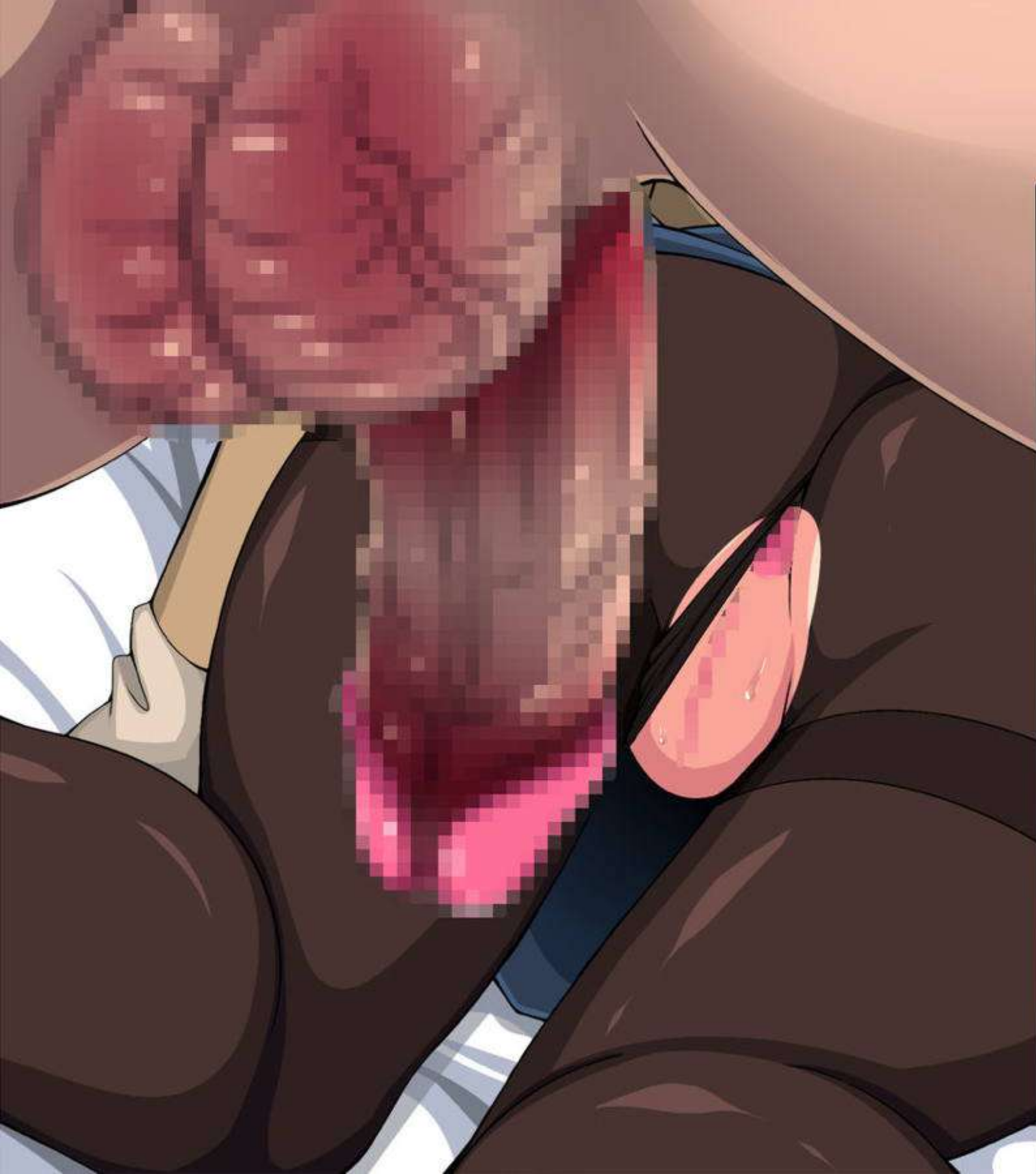


































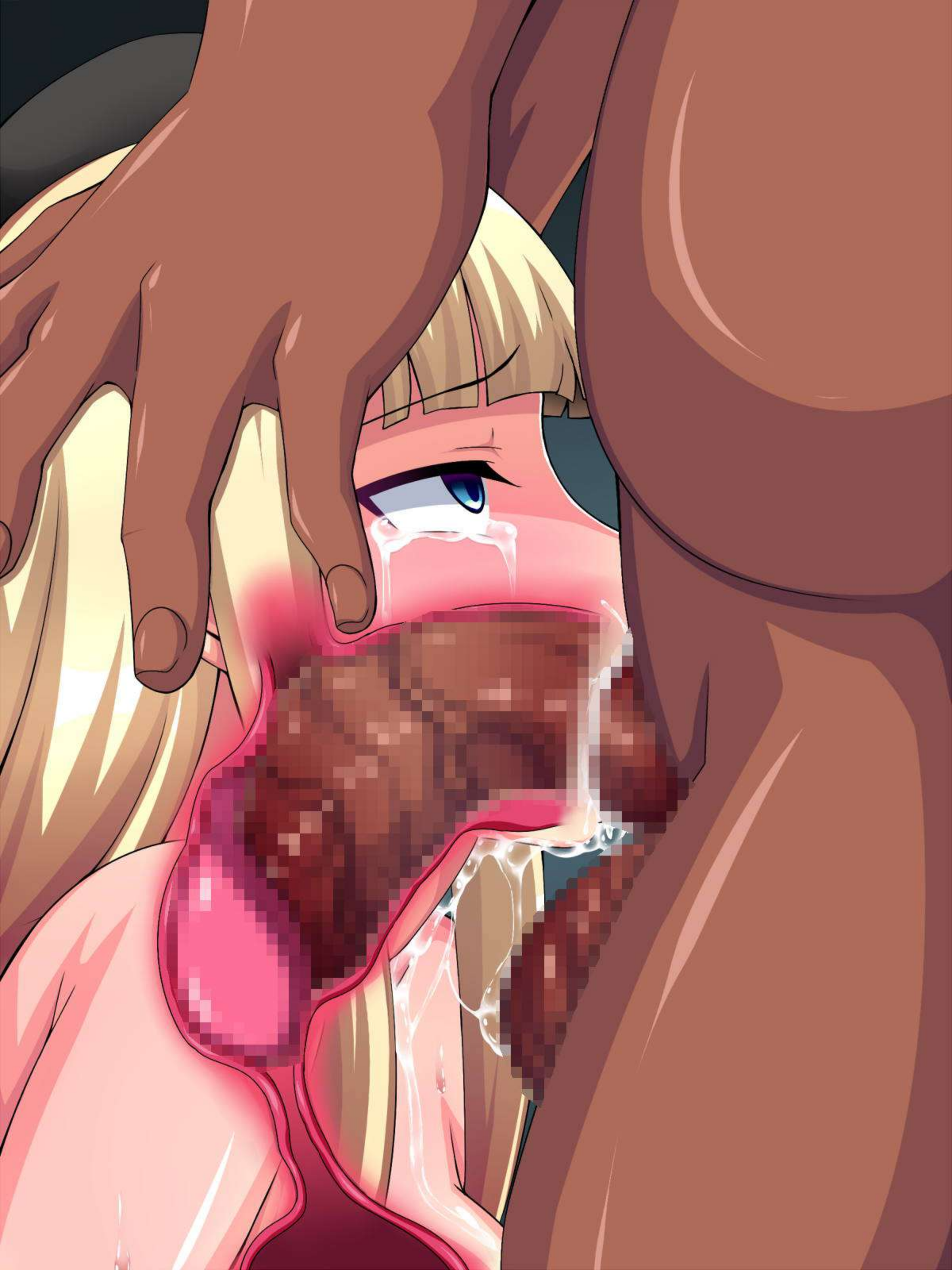










































∩
数時間後
∩



















































